



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成19年10月20日
通巻53号

第9回 下水文化研究発表会を開催します

ふくりゅう 52号でお知らせしましたように、11月17日(土)に第9回下水文化研究発表会を開催いたします。研究発表論文は13編とこれまでに比べて小数ですが、十分な発表時間が確保できるとともに、聞き逃してしまうことも少なくなります。応募いただいた方々に御礼申し上げますとともに、多くの方に参加していただき、議論の場として盛り上げてほしいと思います。

今回は、関東では久しぶりの「下水文化を見る会」も行われます。晩秋の一日、武蔵野の水辺と古民家を訪れてみてはいかがでしょうか。研究発表会、下水文化を見

る会とも詳しい内容につきましては、同封の開催要領を参照のうえ、ふるって参加申し込みをしていただきたいと思います。

この研究発表会では、本会のバングラデシュ事務所スタッフのトファイエル・アーメッド氏を日本へ迎えます。海外援助を受ける側に近い立場から、我々の活動をどのようにとらえているのか、発言してもらいたいと思っています。なお、招聘にあたっては、本号でお知らせしておりますTOTO水環境基金の助成金の一部を充当します。

JICA草の根技術協力事業(草の根協力支援型)スタート

本会海外技術協力分科会 バングラデシュ事務所長 高橋邦夫

10月末、本会海外技術協力分科会のかねてからの懸案であった草の根技術協力事業(草の根協力支援型)が契約の運びとなります。

草の根技術協力事業は、日本のNGO、大学、地方自治体、及び公益法人の団体等がこれまでに培ってきた経験や技術を活かして企画した、途上国への協力活動をJICAが支援し、共同で実施する事業です。また、人を介した「技術協力」であること、開発途上国の人々の生活改善・生計向上に直接役立つ保健や教育といった基礎的な生活分野であること、日本の市民に対して国際協力への理解・参加を促す機会となること、以上の3点を特に重視します。

草の根技術協力事業には、「草の根協力支援型」「草の根パートナー型」「地域提案型」の3タイプがあり、今回採択となった事業は、「草の根協力支援型」と呼ばれるものです。「草の根協力支援型」は、国内での活動実績はあるものの、開発途上国への支援実績が少ないNGO等の団体が実施したいと考えられている国際協力活動を、JICAが支援するものです。また、「草の根パートナー型」は、一定の実績を有しているNGO等の団体が、これまでの活動を通じて蓄積した経験や技術に基づいて提案する開発途上国への国際協力活動をJICAが支援する事業、「地域提案型」は、地方自治体が主体となり、その地域社会がもつ知識や経験を活かした事業を実施することにより、開発途上地域の経済及び社会の発展に貢献することを目的としています。

草の根技術協力事業(草の根協力支援型)の事業実施に到る過程は次の通りです。

STEP0. 事業アイデアの相談

STEP1. このアイデアは実施可能?資格審査や、現地との情報交換

STEP2. 事業提案書を作成

STEP3. 事業提案書にコメントをもらう

STEP4. コメントへの対応案を作成

STEP5. 在外事務所等との調整および了解

STEP6. 採択内定、結果通知

STEP7. 相手国の了承取付

STEP8. 業務委託契約の締結

STEP9. 事業実施スタート

STEP10. 進捗監理(モニタリング)と評価

一般にSTEP0~STEP5までに要する期間は2~6ヶ月程度、STEP6~STEP8までに1年以内とされています。

今、手元の資料を見ますと、初めに提出した事業提案書の日付は、2005年4月18日でした。酒井代表と私とで、当時渋谷にあったJICA東京国際センター(現在広尾にあるJICA地球ひろばに移転)を訪ねました。JFGE(環境再生保全機構地球環境基金)の助成活動(2004年4月~2007年3月)を始めてちょうど1年目のことです。その後、JICA担当者とSTEP3~STEP5のやり取りを月に一回程度繰り返し、その年の9月には、ほぼ現在の内容の事業提案書が固まりました。そしてSTEP6の採択内定を受けたのが今年の3月でした。内定を受けるまでに約2カ年を要したのには、我々の知らない要件がありました。後で知ったそれは、JFGEの助成活動と本事業の同時並行は認められないというものでした。そんなことは当時、誰も教えてくれません。

採用内定を得た後、バングラデシュ側において、これまた煩雑な手続きがありました。了承取付の条件としてNGOAB(NGOの活動と金銭面の動きを監視する政府機関)に対して海外NGOとして認証を受けなければなりません。さらにNGOABの登録認証を申請する条件として、バングラデシュに銀行口座を開設する必要があり、

それらの手続きのため、定款や日本のNPO認証の英語訳、活動概要、JICAの推薦書、現地の事務所証明、担当者の証明書、登録料1500米ドルなどと13項目にわたる書類の作成と手続きが必要でした。ちなみに、銀行口座開設は今年5月末、NGOABの登録は9月11日に受領の運びとなりました。この間、現地メンバーであるTofayel Ahmed 氏の真摯な助力が無ければ、何も出来ていなかったでしょう。そして現在、相手国の了承取得を経て、契約の運びとなった次第です。

JFGEの助成による3カ年の活動は、ようやく我々の活動の基礎固めが出来たという段階です。我々のバングラ

デシュでの衛生改善と資源循環を目的としたトイレ普及活動は、だからこそ継続してはじめて意味の有る活動であるとの思いがいつそうつのります。酒井代表の努力で、草の根技術協力事業に並行する形で、TOTO水環境基金助成を得ることが出来ました。私は草の根技術協力事業のプロマネとして臨みますが、初めての体験は、毎度のことながらハラハラ・ワクワク・ドキドキの連続となりそうです。

※草の根技術協力事業については、下記を参照。

<http://www.jica.go.jp/partner/kusanone/index.html>

TOTO水環境基金による助成決定

本会では TOTO 水環境基金へ「バングラデシュ農村地域でのエコサン・トイレ普及による資源循環、環境改善活動」の助成を申請していましたが、このほど助成内定の通知を受け、JICA 草の根技術協力と同じく 10 月より活動開始の運びとなりました。

この活動では、3年間の地球環境基金助成による活動の2年度目から開始したムンシガンジ県スリナガル郡における活動を発展させることを意図しています。地球環境基金初年度（2004年度）から開始したコミラ県での活動は、別掲のように JICA 草の根技術協力事業・協力支援型で引き継がれますが、スリナガルにおける活動は、今年度イオン環境基金の助成によってフォローアップを行っております。それとともに、スリナガルでの活動で協働している NGO である SPACE を主宰するアジャール氏が、バングラデシュ国内で築いてきたネットワークを通じてスリナガルの成果を伝播したところ、SPACE のパートナー NGO のいくつかは、それぞれの活動地域において自費でコミラやスリナガルで導入したタイプのトイレを建設し、設置希望者もリストアップされるようになってきました。

こうした動きをバックアップすることで、エコサン・トイレがバングラデシュの多くの地域に広がっていくことが可能になると考えています。活動期間は2年間で、初年度（2007年10月から1年間）680万円の助成を受けることができました。プロジェクト実施地区は今のところ5箇

所を考えており、合計 150 以上のエコサン・トイレをつくることにしています。実際の活動は SPACE とそれぞれのプロジェクト地区で活動しているローカル NGO が行うこととなりますが、日本下水文化研究会（JADE）としては、日本からの技術支援を行うとともに、バングラデシュ事務所の現地スタッフをこの10月より1名増やして2人体制としました。

今回プロジェクトを実施する地区は、ベンガル湾に近く地下水は塩水の問題も生じている地区や、北西部の乾季には旱魃も起きやすい地域、井戸水ヒ素汚染被害の著しい地域など多様です。エンジンつきのボートがおもな移動手段となっているところもあります。技術支援においては、それぞれの地区に応じた工夫も必要になると考えられます。地域の特性によって、衛生改善や尿資源の利用に求める人々のニーズがどのように違っているのか、また導入後の人々の意識の変化なども明らかにしたいと思います。さらに、トイレを作るというだけでなく、プロジェクト後に村の人々が自ら行うことが求められる管理についても具体的に提案していかなければならないと考えています。できれば、バングラデシュで広がりつつある、有機農業を進める NGO との連携なども探っていきたいところです。

会員の方からの主体的・積極的な協力・参加を求めています。是非、この機会に参加してみたいかですか？

（本会代表 酒井彰）

尿尿・下水研究会第47回例会（「研究会所蔵ビデオの放映」）報告

9月26日（水）18時30分より、東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センター会議室で「尿尿・下水研究会の第47回例会」が開かれました。今回は、研究会が所蔵している尿尿や下水に関するビデオ6本（ほかに音声記録1本）を放映しました。

手作りドキュメンタリー映画「うんちのススメ」

このビデオは、本研究会の準会員である大友慎太郎氏が映像学科に在学中に自主製作したもので、小学校の先生と尿尿の海洋投棄に従事している方から話を伺い、それぞれの立場で「尿尿」というものをどの様に捉え接しているかをまとめたドキュメンタリー映画です。すなわち、前者は児童が学校のトイレで「うんち」をしたがらない実態を打

開するために始めたユニークな授業を、後者は環境問題から国際的に禁止されることになった尿尿の海洋投棄の現状を紹介しています。それぞれの登場人物が語る言葉の端々に日本人の「尿尿観」を垣間見ることができました。製作者の大友氏から「何故、尿尿を題材とした作品を製作したのか」についてのメッセージが届いていますので、以下に掲げます。

『日々の生活の中で無意識のうちに「興味が無い」としていたモノでも、何かの拍子でふと目をやるキッカケさえあれば意外な発見があり、そこにドキュメンタリー映画の存在意義があります。尿尿は、社会的課題を守備範囲として備えているにも関わらず、多くの人々が「尿尿」という

単語を聞いただけで無意識のうちに「尿尿なんて汚いだけで自分にとって関係は無い…」としてしまうものであることから、私はあえて、尿尿を題材としました。「尿尿」だけを見るのではなく、「尿尿」を通して自分の実生活の中で見落としてしまいがちだったものに対して、もっと興味を持ち、より充実した生活を送ってもらいたいと考えています。』

このほかに、以下の映像が放映されました。
■ 常滑焼きの歴史に関する講話（講師：中野晴久氏、ビデオ製作：石井明男氏）

- とこなめ歴史発見（原作：柿田富造氏、常滑ケーブルテレビ製作）
 - 昭和36年の調布尿尿処理場（三機工業製作）
 - 東京都文化財めぐり・三河島処理場ポンプ室（地元ケーブルテレビ製作）
 - アユが泳ぐ神田川（テレビ番組）
- さらに、音声ですが、一昨年の第8回下水道文化研究会発表会・基調講演の「古代宮都と汚水処理」（講師：松井章氏）のさわりの部分を聴きました。
(副代表 地田修一 記)

第48回尿尿・下水道研究会ならびに第41回定例研究会(兼 第49回尿尿・下水道研究会)のご案内

	第48回尿尿・下水道研究会	第41回定例研究会(兼 第49回尿尿・下水道研究会)
日時:	平成19年12月7日(水) 18時30分～	平成20年1月24日(木) 18時30分～
会場:	東京ボランティア・市民活動センターB会議室(第48回尿尿・下水道研究会)、A会議室(第41回定例研究会) (飯田橋・セントラルプラザ10階) JR 地下鉄飯田橋駅下車徒歩1分 TEL: 03-3235-1171	
講師:	栗田彰氏(本会評議委員)	大島善徳氏(大悠社)、ひろゆうこ氏(漫画家)
演題:	「江戸下水の町触集」の解説	「トイレのひみつ」刊行のいろいろ(仮題)
内容:	当研究会刊行の下水道文化叢書-9-「江戸下水の町触集」の著者である栗田彰さんから、この本のエッセンスをお聞きするとともに、膨大な町触に目を通し、その中から下水に関するものを拾い集め、読み下し文にし、著者の「註」と「ひと言」をつけるにあたっての苦労話を語っていただく。	学研から刊行された児童向けの「トイレのひみつ」(非売品)は、身近で毎日お世話になるのに知らないことが多いトイレについて、よくわかるように漫画で解説した本である。ストーリー作者の大島氏と漫画を描かれたひろ氏においていただき、この本ができるまでの秘話を語り且つ描いていただく。

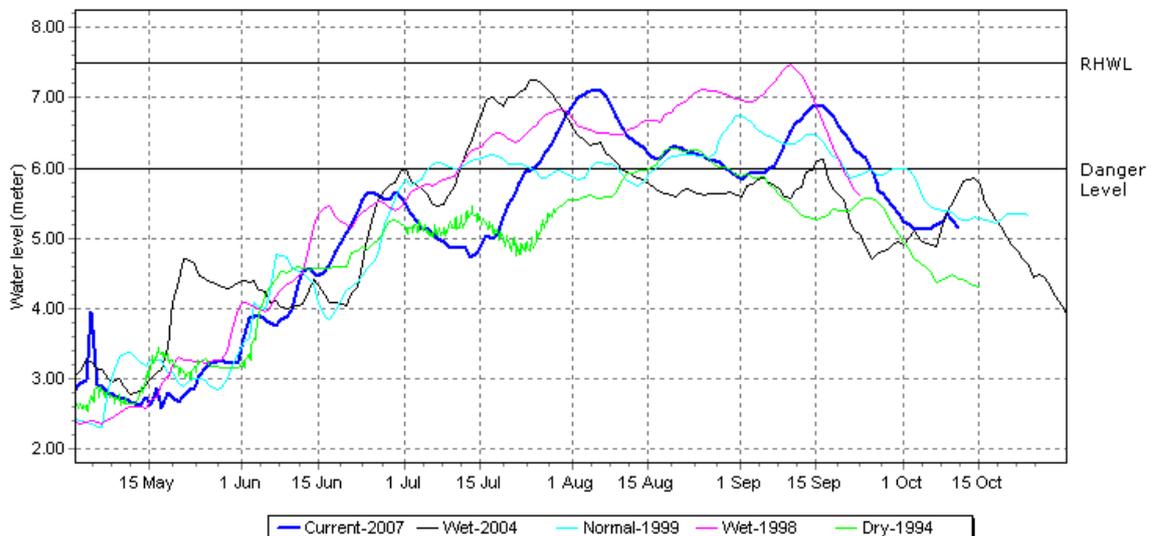
Bangladeshの8月洪水(高水)

本会運営員 高橋邦夫

今年7月30日から8月13日までのBangladesh訪問では、私としては過去3年間の体験の中で、何時にない洪水(高水)に遭遇しました。まず、Daccaについて荷を降ろしたホテル前のボナニ湖の水位が、周辺に張りつくスラム

群の床を洗う位に上昇していたことです。テレビでは上流側に位置するインドでの洪水災害のニュースを流していました。
8月1日、エコサン・トイレの活動サイトである、

Padma River at Bhagyakul



Munshiganj 県 Srinagar 郡の3つの村のうち、Basailbogh 村のみ車が入れる状況でした。他の2村に通じる道路は水没しており、舟での移動しか手段は有りません。村は多くのバリ(盛土された宅地に数所帯の親族が小さな集落を形成したものであり、雨期にはまさに小島となる)から構成されていますが、バリに通じる道路が冠水し、かろうじて裾まくりして辿り着けるバリや、舟でしか行けないバリも有りました。

例年、雨期に見てきた光景との差異は、水位が高いことはもちろんのこととして、道路とバリに架かるこの季節特有の竹橋が極めて少なかったことです。竹橋すら架けられないほどに水位が上昇していたといえます。その後、数日にわたり、水位は上昇し続けました。下の写真は、滞在中に見た水位の変化の様相です。

また、前のページ図は、Bangladesh Water Development Board, Flood Forecasting and Warning Center (FFWC) が提供する洪水情報です。バングラデシュの河川水位の状況は、FFWC の web page (<http://www.ffwc.gov.bd/>) で検索できますので参照してください。まさしく村の水位は近隣を流下するガンジス川の水位に依存していることが判ります。Bhagyakul はこの村の

近くにあるフェリー港マワガット付近の水位観測点です。Padoma river は現地の言葉でガンジス川のことです。

そして懸案のエコサン・トイレは、写真に示すように水位は便座にまでは到らず、家屋同様に機能していました。ただし、3ヶ所のトイレの乾燥床(お尻を洗った水の排出先)が水没しました。

8月10日、地元紙 The Daily Star によれば、2000万人が被災し、156人の犠牲者を出しています。その多くは子供で、安全な水が確保できずに飲んだ水が原因の下痢症、および蛇に噛まれて死ぬ場合が多いことが報じられました。また、政府や大手のNGOによる物資支援活動も行われていました。

ガジ・バリと呼ばれるバリでは、水位上昇に応じるべく、竹橋の桁上げ作業を行っていました。このバリに住む男衆総出で、手際良く作業を進めていました。無駄の無い連携プレーは、まさに生まれつきの水の民を思わせるものがありました。約2時間後、50cm程桁上げた竹橋が完成しました。そして渡り初めに招かれた次第です。



(左) 8月1日バリへの進入路この先に約20～30世帯が生活している、(中) 8月9日約1週間で50cmの水位上昇、(右) トイレと高床の家屋は機能しているが左の建物(台所)の床は水没している。

旧事九官録 巻3

物質三態の事

本会運営委員 森田英樹

実験室には、白い粉末、三脚、ガスバーナー、るつぼ、三角架が置かれていた。私が中学2年生の時の理科の実験である。この白い粉末をるつぼに入れて加熱するとどのように変化するかという実験であった。まったく単純な実験ではあるが、見当がつかない。マッチを擦るのにこずる班があるものの、すぐに実験が開始された。私も興味津々、白い粉末の行く末を案じて見つめていると、次第に粉末はグラグラと沸き立ち、見る見るうちにその姿を消して行く。後には少しばかりの焦げ跡が残るばかりであった。一体、粉末はどこに行ってしまったのか、なぜ消えたのか？中学生の私にとっては衝撃的な実験であった。

先生の説明によると、物質は温度や圧力によって固体、液体、気体の3つの姿に変化する。なんでも物質三態と言うらしい。常温では固体である物質は加熱される事によって液体へと変化し、やがて気体となり姿を消してしまっただろう。水が氷になること、蒸気になること位は知っていたが、驚きであった。

「固体、液体、気体の3つの姿」なるほど確かに物質には3つの姿が存在する。私には、すぐに次なる疑問が脳裏をかすめた。「うんこ」は固体、「おしっこ」は液体、「おなら」は気体、これも物質の三態というものであろうか？なるほど「うんこ」が気体になれば「おなら」になりそうだ。臭いが似ている。しかし「おしっこ」が固体になっても「うんこ」にはなりそうもない。色が違う。物質三態には温度だけではなく圧力も関係しているらしい。この圧力にカギがあるのかもしれない？万事につけ、常に妙な疑問が生じては質問をし、先生にひどく叱られていたが、今回ばかりは先生に質問はしなかった。常識的に物質三態とは無関係に思えたから、いや、私も中学2年生、少々色気づいたのか、女の子のいる教室で「うんこ」だ「おなら」だと連発するのが憚られたのであろう。

この、悶々たる疑問を解決すべく急ぎ帰宅し、フライパンで「うんこ」を加熱したり、「おしっこ」を冷蔵庫で冷やしたりするだけの行動力があれば、私も科学者としての

芽が生まれ、今では少しは真っ当な人間になれたかもしれない。しかし、そんな事もすっかり忘れてしまい、とうとう・・・。

あれから幾星霜。トイレ本を求めて古書店を巡っていると、私の目に飛び込んできた三文字『屎・尿・屍』これぞ、

まさに「物質三態」しかもこれほど簡にして要を得たタイトルは見たことも、考えたことも無い。震えるほどの感動を覚えた。著者『高野六郎』果たして子供の頃の疑問を説き明かす「物質三態 科学の書」か？「トイレの書」か？恐る恐る手をのばした。では後便・・・。

関西支部講演会・パネルディスカッション「森林から水環境を考える」のお知らせ

本会関西支部では、拡大運営員会（総会）を兼ねた第4回講演会・パネルディスカッションを開催します。今回のテーマは「森林から水環境を考える」です。

日時：11月3日（土）午後1時～5時

場所：大阪 NPO プラザ3階ホール

大阪市福島区吉野 4-29-20 TEL: 06-6465-8390

（阪神野田駅・JR海老江駅・地下鉄千日前線阪神野田駅下車徒歩13分）

参加費：無料

基調講演 「森林から水環境を考える」

滋賀県立大学 教授 國松孝男

パネルディスカッション「森林と水環境」

パネリスト：國松孝男氏（滋賀県立大学）、駒井幸雄氏（大阪工業大学）、松永一成氏（日本テピア）、森下元之氏（NPO 法人関西修景自由作家連合）

コーディネーター：藤田俊彦（本会関西支部）

後援：大阪府、大阪市

協賛：関西水環境ネット

連絡先 日本下水文化研究会関西支部 TEL: 06-6972-0071

※懇親会も開きます。ふるってご参加ください。

第1回バルトン記念基金管理委員会が開催されました

バルトン記念基金の設置は本年度の総会において承認されましたが、9月13日藤沢市において第1回バルトン基金管理委員会が開かれました。役割分担、管理規定、バルトン賞の設置などを決定し、バルトン没後110年に当たる2009年度のスコットランド訪問を含めた3ヵ年計画を策定することとしました。なお、基金の設置目的となっている第1回バルトン賞は来年5月に予定するバル

トン墓前際に授与することとし、選定は12月の次回委員会で決定します。当面は、昨年のスコットランドでのシンポジウムで講演されたヘリオット・ワット大学ジョビット教授の論文翻訳を手がけることとしました。

委員会の構成は以下の通り。委員長 稲場紀久雄、副委員長 酒井彰、委員 谷口尚弘（事業企画担当）、稲永丈夫（海外担当）、甘長准（国内担当）

運営委員会・事務局より

- **会費納入のお願い**：会費未納の会員には、振込用紙を同封しています。ふくりゅう51号でも指摘させていただきましたが、期待通りの会費納入がないために翌年度の予算作成が困難になる現実が生じています。本会のNPO活動は、会員各位の会費が基盤となって行われていることを今一度ご認識いただき、早急に納入していただきますようお願いいたします。
- 本会の海外活動は、一定の軌道に乗ってきたと言え、日本ばかりでなくバングラデシュで法人格を有する団体となりました。その分会計報告などの事務も増えますことから、現有の運営委員会体制では円滑な運営が厳しくなることが予想されます。早急に検討しなければならぬ事項と認識しておりますが、会員各位のご理解、ご協力を切にお願いいたします。

編集後記 4年ぶりの東京での研究発表会になりますが、4年前と同じく海外援助をテーマとして選びました。私たちができることとしてトイレづくりから入り、それがたまたま農地の劣化など現地のニーズにマッチしたことから、展望も開かれつつあるように思います。▶この段階で、我々がしてきたことは、バングラデシュの人々にとって、また、活動を担ってきた私たちにとって何だったのかということをお聞きしたいです。▶研究発表会へ多くの方が集まり、議論に参加していただくことを願っています。（酒井彰）



水没した登校路を下校する子供たち。登校できない子もいるので、校長先生は通学ボートがほしいと言っていました。

ふくりゅう 通巻53号目次

第9回下水文化研究発表会を開催します	1
JICA 草の根技術協力事業スタート	1
TOTO水環境基金による助成決定	2
屎尿・下水研究会例会報告	2
屎尿・下水研究会例会/定例研究会案内	3
バングラデシュの8月洪水	3
旧事九官録巻3 物質三態の事	4

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>